

世界と日本 二面からみる明治維新

—幕末日本の向かう先は—

大庭 彩花・柴 璃子
豊島岡女子学園高等学校

幕末・明治維新期は政治的事象が複雑に絡み合った激動の時代である。時系列で出来事を並べるだけではわからない、人々の感情や思惑、時代の空気—それらを臨場感を持って理解するために、元尊王攘夷派で倒幕派の志士である西郷隆盛、さらには好奇心を抱いて日本を訪れたイギリスの外交官であるアーネスト・サトウの視点から小説を書いた。第三者目線よりさらに近づいた登場人物目線で語ることにより、当時の人々が何を考え何を願ったのかがより親密にわかるようにし、さらに同じ出来事について書かれた視点の違う二つの小説を比べることにより、考え方の違いや思想の違いをより整理できるようにした。

キーワード：幕末・明治維新期、西郷隆盛、アーネスト・サトウ、小説

1. はじめに

1.1. 背景

幕末・明治維新期は尊王攘夷をはじめとする思考が複雑に絡み合っており、この期間に起きた出来事をただ時系列で追っていくだけでは因果関係がわからづらい。そこで、どのようにしたら幕末・明治維新期について自然な理解をすることができるのか、その方法を模索した。

模索の結果たどり着いたのが、幕末・明治維新期を生きた人物の視点で小説を書くことである。このような方法をとることによって、特定の人物に焦点を絞りその人物の心情などにも触れることができため、臨場感を持ってその時代について考察できると考えた。さらに、一人だけに着目するのではなく、二人について注目することで、多角的な見方を可能にした。加えて、日本人と外国人の双方の視点を用いることによって、諸外国から大きな影響を受けた日本の幕末・明治維新期の実像を浮き彫りにすることに努めた。

1.2. 目的

前述の通り、日本人・外国人の両方の視点で幕末史を捉え、またそれを臨場感のある小説として表現することで、なぜ幕末の日本が激動の時代に向かい明治維新へとつながったのかについての考察を可能に

し、幕末・明治維新の実像を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

2.1.1. 人物の設定—西郷隆盛

注目する日本人として設定したのは西郷隆盛である。西郷は1827年に鹿児島城下加治屋町(薩摩藩)に生まれた。西郷は薩長同盟の成立や王政復古成功に貢献し、また戊辰戦争を巧みに主導するなど、多くの功績を残し、のちに維新三傑の一人に数えられた人物である。西郷は幕末から、明治維新の終わりと定義づけられる西南戦争までを生きた人物であり、その視点から幕末史を考察することは有意義であると考えた。

2.1.2. 人物の設定—アーネスト・サトウ (Sir Ernest Mason Satow)

注目する外国人として設定したのはアーネスト・サトウである。サトウはイギリス人外交官であり、通訳としても活躍した。彼は1862年に日本に来日し、明治維新の前後を通じて25年に渡り日本に滞在した。その滞在中、幕末の日本の事件や困難な政情を身をもって体験しており、さらに、日本に滞在した時の回顧録も残しているため、より実証的に外国人の視点から見た明治維新の様相を明らかにできると考えた。ゆえに、その視点から幕末史を考察することは有意義であると考える。

2.2. 小説の作成

幕末・明治維新期について書籍をもとに調査を行い、幕末・明治維新期の出来事について、西郷およびサトウそれぞれの立場による捉え方の違いを取り上げた。サトウの視点を扱った小説①は大庭が、西郷の視点を扱った小説②は柴が、それぞれ作成し、お互いに推敲を行うことで考察を深めた。

3. 結果と考察

3.1. 小説①

作成した小説の一部を掲載する。1862年に勃発した生麦事件について、サトウの視点から書いたものである。

その知らせを聞いても、私は少しも驚かなかつた。

ホテルの外で立っていた私の目の前を、騎馬に乗った人々が慌てて通り過ぎていくものだから、何が起こったのかと尋ねたのだ。

「イギリス人が、神奈川で切られた」

なるほど、と、妙に冷静な自分がいる。日本で仲間が殺されたのだぞ、なぜ取り乱さないのか、と吠える自分も心の奥にいるにはいたが、どこか現実味がない。

そもそも、日本人による外国人の殺害は、日常茶飯事なのである。

これまでにも、激昂した侍に切られたものは大勢いる。安政六年七月にはロシア人、十一月にはフランス副領事に使われていたシナ人、その後三ヶ月もたたないうちにオランダ人船長が殺害されていたり、と、数えだしたらきりがない。私は日本に来る前から、剣士の怒りを買ったことによる不慮の死に備えることが大切であると知っていたし、そのために相当の火薬や弾丸を買い込んでいた。きちんと備えをしていることへの安心感と、元から同情心というものが足りていない性格が相まって、明日は我が身であるとか、このまま日本にいってはいけないのではないかとか、そんな恐怖心を抱くことはないのである。

とは言え、と、私は息をついた。

②これから大変なことになるぞ、と。

その残虐な事件は、突然起つたという。

神奈川と川崎の間の街道を乗馬で進んでいたリチャードソンという商人を含む一行は、途中、大名の行列に出会った。行列の主は、薩摩藩主の父、島津久光であった。大名の家来に、わきによれと命じられたリチャードソン一行は道路の脇を進む。しかし今度は、③引き返せと命じられたので、その通りに馬首を巡らせようとした、その時だった。

突然大名行列のうちの数人が武器を振るって襲い掛かり、リチャードソンらを重い刃で切りつけたのだ。何とか生き延びた夫人が横浜の外国人居留地に駆け込んだころには、もうリチャードソンは亡くなっていたという。

居留地は、たちまち蜂の巣をつついたような騒ぎになった。それだけではない。この大事件は、日本国内のヨーロッパ人にきわめて大きな衝撃を与えたのだ。

3.2. 小説②

作成した小説の一部を掲載する。1862年に勃発した生麦事件について、西郷の視点から書いたものである。なお、西郷は当時薩摩藩の実質的な権力者である島津久光の命により沖永良部島へ島流しになっており、直接事件に関与していないため、下の小説は西郷が薩摩藩の同士と手紙のやり取りをして得た情報をもとに西郷の視点に立って書いたものである。

西郷隆盛は大きく息をつくとドンっと地面に腰を下ろした。

(島流しにはだいぶ慣れてきたとはいえ、やはりきつい。)

ここ沖永良部島は前回の奄美大島、今回の徳之島に続き島流しにされた場所だが、以前の島より厳しい生活を余儀なくされていた。牢屋に閉じ込められ常に監視された状況に置かれ、高温多湿のこの島では雨ざらしに近い生活だった。しかし、同郷の後輩などの尽力で待遇も改善しつつあつた。

(本土に戻れたら必ず恩返しをする。)

そう固く誓って決意を固める以外にはできることが少なかったが、代わり映えのない西郷の日々にも、しばらくすると大きな衝撃がもたらされた。友人からの文によると、武藏生麦村において、薩

摩藩主の父、島津久光の大行列を横切った外国人が斬られたそうだ。

(④なぜ異国人が大行列を横切ったかは分からぬが…。⑤薩摩は攘夷を成し遂げたということか。今までずっと心に秘めてきた、異国人への不満を、ついに晴らすことが出来た…)

西郷は感慨の念を封じることが出来ない。ただ、無視するには大きすぎる疑念が西郷の脳裏をかすめたのも確かだった。

(常に外国の顔をうかがっている幕府が、今回の件をどう受け止めるか…。薩摩の志士に害が及ぶことだけは避けたい。それに、斬られたほうも黙っているとは思えない…。いずれ何かしらの報復をしてくるかもしれない。)

西郷の疑念は命中した。しばらくのうちに、イギリス艦隊六艦が鹿児島湾に入港し、生麦事件の加害者をイギリス士官の立会いの下処罰すること、被害者に賠償金を支払うことをもとめてきたのだ。薩摩はこれを素直に受け入れるわけにはいかない。またたく間に双方の間で戦争が始まり、薩摩は多大な損害を被ったのである。西郷は薩摩が心配でならない。

(直接事件に関与できないことが、なんと歯がゆいことか…)

おもむろに外に目をやると、格子の隙間から星が見えた。

(生かされたこの命。何に役立てることができるか。)

この信念があったからこそ、この島流しにも今まで耐えてこられたのだろう。冷えた麦の握り飯を咀嚼しながらふとそう思った。

* * * * *

⑥西郷はこのとき日本の大勢が徐々に尊王攘夷から倒幕へ移り変わっていくことはまだ知らなかつた。

3.3. 小説の比較・考察

抜粋した小説中の下線部を中心に補足する。

下線部①はいつ何が起こるかわからない、外国人にとっては極めて危険ともいえる日本に長年滞在し、

その政情を細かに考察したサトウの冷静さが窺える一文にした。また、日本人による外国人の殺害は日常茶飯事とも言っているように、当時尊王攘夷の考えを持っている日本人がたくさんいたことが読み取れる。

下線部②は生麦事件はただの不慮の事故では済まされない、国家間の大きな溝となりうる出来事であったことが予見できる一文にした。この一文からは事件の深刻さ、緊迫した様子が読み取れる。

下線部③は大名の家来の言う通りにしたのに、襲い掛かられてしまったリチャードソン一行が受けた理不尽な仕打ちと、一行の憐れな様子が読み取れる一文にした。江戸時代においては大名の行列を横切ることは大罪にあたる。しかし、外国人であるリチャードソン一行はそのことを知らなかつた可能性があることも示唆した。尊王攘夷の思想を持つ人々は外国人というだけで目の敵にしており、さらに大名行列を横切ったものだから許せないと感じこのような行動に出る人が現れたのではないかと考えられる。

下線部④は西郷が大名行列を横切ることが罪であると分かっていることが読みとれる一文にした。日本では大名行列を横切ることが大罪だと認識しているのが当たり前であったので、外国人は日本の慣習にとても詳しいわけではなく、また日本人も外国人の兵力や備えをあまり理解していなかつたのではないかと考えられる。

下線部⑤は尊王攘夷の志士としての西郷的一面がうかがえる一文にした。外国人を斬りつけたら後で報復をしてくるかもしれないと危惧しつつも、尊王攘夷の思想が強かったのではないかと推測できる。

下線部⑥は当時の江戸時代の思想の変化が窺える一文にした。薩英戦争をきっかけに、攘夷に限界を感じる人々が増加する。この頃から、外国諸国を毛嫌いするのではなく、むしろその進んだ技術を取り入れ、江戸幕府を倒そうという気運が高まっていった。

また、下線部①と③から日本は危険だと以前から認識していたが、外国人が理不尽な殺され方をしたことにより、さらに外国人内で日本に対する恐れや怒りの感情が高まり、多額の賠償金の要求につながったのではないかと考えられる。

下線部②と⑤から西郷は薩摩が攘夷を成したこと嬉しく感じているのに対し、外国人の怒りを買ったことにより事態が非常に緊迫している様子との対比が読み取れる。見る視点の違いによって事件に対

する考え方方が大きく異なっていると考えられる。

下線部③と④から日本人は外国人がなぜ大名行列を横切ったのかわからない、外国人は日本人がなぜ突然襲い掛かってきたのかわからないというとお互いの行動が理解できない様子がそれぞれ読み取ることができる。

小説を書く過程において、外国人に対して強い反発を抱く日本人と、日本人を危険な存在としてとらえつつも交渉相手として冷静に受け取っている外国人の対照的な姿が多く見られた。また、開国したばかりの不安定な情勢で外国人も日本人のことをよく知らず、日本人も外国人のことを知らなかつたために、生麦事件ひいては薩英戦争が起つたのではないかと考えられる。さらに、この一連の出来事により、薩摩は外国の脅威を知り、尊王攘夷の思想を改めて倒幕運動に動きだしていったのではないかと考えられる。

著:アーネスト・サトウ 訳:坂田精一
人物叢書新装版西郷隆盛 (2017) . 吉川弘文館.
著:田中惣五郎

4. まとめ

この試みにおいて、立場によってものの見方は大きく変わり、人々の考え方の違いが事件に対して大きく影響するということが改めて分かった。幕末・明治維新期の日本は、様々な立場に置かれた、多種多様な思想を持った人々が交錯していたからこそ、複雑さと奥行きの深さを生み出したのである。また、開国という大きな転換点をむかえ、外国人との交流が増えたことも倒幕や明治維新に大きな影響をもたらしたと考えられる。このような「様々な人の視点から一つの事実を考察する」という観点は、現代においても通じる、重要な考え方なのではないだろうか。

謝辞

この活動を進めるにあたって、意見やアドバイスをくださった豊島岡女子学園中学校・高等学校の先生、生徒の皆さんに御礼申し上げます。

参考文献

- 一外交官から見た明治維新(上)(1960). 岩波書店.
- 著:アーネスト・サトウ 訳:坂田精一
- 一外交官から見た明治維新(下)(1960). 岩波書店.